

小倉遊亀と 院展の画家たち展

滋賀県立近代美術館所蔵作品による

2019年4月6日(土)～5月26日(日)

※会期中展示替えがあります(前期:4月29日まで、後期:5月1日から)



小倉遊亀《姉妹》昭和45年(1970) [後期]

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：山本・安岡 広報担当：岡田・大庭

静岡市美術館 〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

小倉遊亀と院展の画家たち展 滋賀県立近代美術館所蔵作品による

明治31年(1898)、岡倉天心によって東京・谷中に創立された日本美術院には、横山大観や菱田春草らが集い、新たな日本画の創造に挑みました。経営難の時代を経て、天心の没後、大正3年(1914)に大観、安田靉彦、今村紫紅らによって日本美術院が再興されると、美術院の展覧会(院展)には彼らのほか小林古径、前田青邨、速水御舟をはじめ、京都の冨田溪仙や大阪の北野恒富など個性豊かな画家たちが意欲作を次々と発表しました。

滋賀県大津市出身の小倉遊亀(1895-2000)は、奈良女子高等師範学校を卒業後しばらくは教壇に立ちながら画家を志していましたが、大正9年(1920)、25歳で安田靉彦に師事しました。以後、院展の先輩たちの感化を受けながら、また後進の育成にも力を注ぎつつ研鑽を積み、105歳で没するまでひたむきに描き続けました。彼女の作品は、伝統を受け継ぎながらも、時代に合った新しい感覚を備え、その明るさと力強さ、気品の高さをもって、没後20年を迎えようとする今日もなお人々を魅了してやみません。

本展は、小倉遊亀と日本美術院の画家たちを収集方針に掲げ活動してきた滋賀県立近代美術館の全面協力を得て、同館が所蔵する名品により、小倉遊亀の芸術の精華とそれを育んだ日本美術院の俊英たちの活躍をたどります。



小倉遊亀《画人像》
昭和37年(1962)
再興第47回院展 後期

【見どころ】

(1) 院展を舞台に繰り広げられた日本画革新の歩み

横山大観、菱田春草、今村紫紅、安田靉彦、速水御舟など時代を代表する日本画家たちの名作が勢揃いします。西洋風の奥行きある空間表現、目の粗い顔料を用いた物質感ある絵肌、緻密な写実表現、歴史を描く試みなど、彼らの創意工夫の軌跡は、日本画革新の歩みといっても過言ではありません。

(2) 小倉遊亀の明るく、温く、たのしい世界

戦前から日本画家としての道を歩み始めた小倉遊亀は、第二次大戦後、日本の社会も美術も劇的に変化する中で才能を大きく開花させました。俵屋宗達を敬愛する一方でマティスやピカソなど西洋の新しい表現にも目を向け、人物や静物などを題材に、鮮やかな色彩と簡潔な構成のモダンな作品を次々と生み出しました。

遊亀は信仰心に厚く、絵を描くことを修行と捉えていました。105歳までひたむきに描き続けたその作品には「花も果実も、人体も、いずれかほとけの姿ならざる」という彼女のメッセージが込められているのです。

(3) 滋賀県立近代美術館が所蔵する日本有数の日本画コレクションが一堂に!

昭和59年(1984)に開館した滋賀県立近代美術館は同県出身の小倉遊亀の生涯の代表作の多くを所蔵するとともに、遊亀と関わりの深い日本美術院の画家たちの作品も長年にわたり収集してきました。改修休館中だから可能になった贅沢な展覧会です。

【展覧会内容】

◆第1章 院展再興への道

日本美術院は明治31年(1898)に岡倉天心によって創立された研究団体です。天心の指導のもと、横山大観や菱田春草は、墨や色のぼかしによって湿潤な大気を表現する描法など、新たな日本画の創造を目指しました。経営難もあり、明治40年頃(c.1907)には美術院の活動は事実上休止していましたが、岡倉天心の一周忌を契機に大正3年(1914)9月に横山大観らによって再興されました。再興された日本美術院の展覧会(再興院展)には、安田靉彦、今村紫紅、速水御舟、富田溪仙、北野恒富らが意欲作を次々と発表しました。

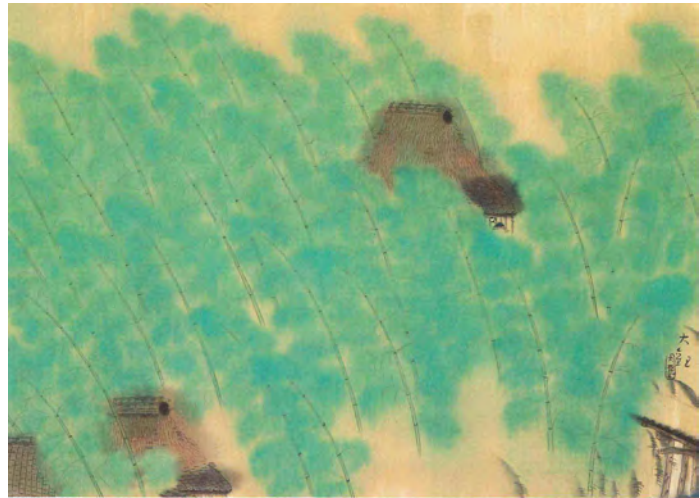
(日本美術院の再興時には洋画部、彫刻部も併設されていましたが、本展では日本画部のみに焦点を当てています)

樹木の配置で暗示される奥行き



菱田春草《落葉》
明治42年(1909) 後期

雨に映える竹林の緑



横山大観《洛中洛外雨十題 八幡緑雨》
大正8年(1919) 後期

仙界に流動する墨と色



らしんじん
富田溪仙《羅真人》(《列仙》のうち)
大正9年(1920)
再興第7回院展 前期

大阪の赤と黒



北野恒富《暖か》
大正4年(1915)
第9回文展 後期



北野恒富《鏡の前》
大正4年(1915)
再興第2回院展 後期

◆第2章 院展の発展と小倉遊亀

この章では、小倉遊亀に大きな影響を与えた院展の先輩たちの作品と、初期から晩年に至る遊亀の代表作をご紹介します。

大正9年(1920)、遊亀は鎌倉の安田鞞彦を訪ね、生涯師と仰ぐことになります。鞞彦をはじめ、速水御舟、小林古径、小茂田青樹ら再興院展の先輩たちの薫陶を受け、遊亀は画家への道を歩み始めました。戦前には写実的で細密な作風でしたが、戦争を経て社会も美術も大きく変わる中、遊亀は大胆な単純化とデフォルメによるモダンな作風を確立しました。

昭和55年(1980)には文化勲章受章の荣誉に浴し、平成2年(1990)からは日本美術院理事長の重責を担うなど、105歳の人生を画道ひとすじに全うしました。

院展の画家たち



速水御舟 らくほくしゅうがくいんむら《洛北修学院村》

大正7年(1918) 前期

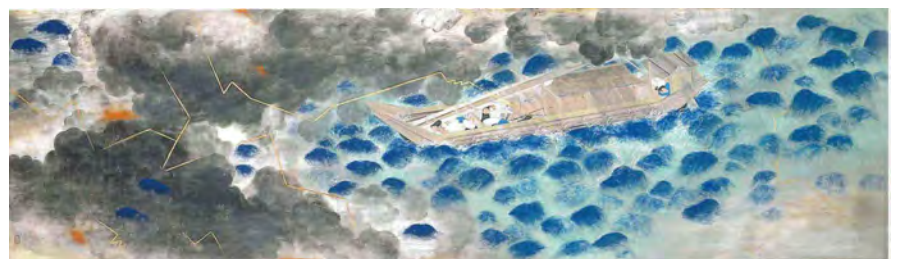
再興第5回院展

御舟の京都時代の代表作。群青と緑青の色合いの微妙な違いによって奥行きと立体感を表している。細かな筆遣いがこの後の細密描写の時代を予感させる。



小茂田青樹《四季草花図 夏》大正8年(1919) 前期

「四季」と題し再興第6回院展に出品されるも落選した六曲二双屏風のうちの一隻。応募534点中入選8点という超厳選の犠牲となったが、朝顔の蔓と花の繰り返しによるリズム感、全体に撒かれた金砂子など琳派風の装飾を近代的な感覚でよみがえらせた意欲作。



小林古径《竹取物語 難破》大正6年(1917) 後期

再興第4回院展に出品した連作「竹取物語」のための習作の1枚。かぐや姫のために龍の頸の玉を求めに船出した大納言大伴御行が暴風雨に遭う場面を描く。怪しく湧き上がる雷雲と激しく屈曲する稲妻がこの世ならぬ力の存在を暗示する。

小倉遊亀



小倉遊亀《初夏》昭和3年(1928)再興第15回院展 前期

初夏の野で熱心に写生をする子どもたち。その真剣なまなざしは画家自身の姿とどこか重なる。細かな筆致による写実的表現は昭和初期頃までの作風の特徴。



小倉遊亀《娘》昭和26年(1951)再興第36回院展 前期

戦後の若い女性の「燃えるような希望に輝く眼」「きかぬ気な張り切ったものごし」を捉えた作品。この時期の遊亀の単純化された造形には、マティスやピカソらの20世紀美術の影響が指摘されている。



小倉遊亀《姉妹》昭和45年(1970)再興第55回院展 後期

紅白の折鶴を手にして満足そうな妹、黄色の折紙とはさみを手に虚空を見つめ何事かに集中する姉、それぞれの表情が描かれる。色数を抑えた中、鮮やかな折紙がアクセントになっている。背景の絶妙なトーンは箔の上に絵具を幾度も塗り重ねて表されたもの。



小倉遊亀《紅白紫黄》平成元年(1989)再興第74回院展 通期

台の上に並ぶ色とりどりの野菜。遊亀94歳の作品。画面はますます洗練され、色と形の造形詩ともいうべき境地に達している。

◆第3章 花開く院展芸術

この章では、天心・大観以来の理想主義と自由な研究を重ねてきた再興院展の名作を紹介します。横山大観や富田溪仙、速水御舟、前田青邨、堅山南風、奥村土牛らの個性あふれる表現、安田鞞彦や中村岳陵の歴史へのまなざし、遊亀よりも後の世代の吉田善彦の清新な風景画など再興院展を舞台に生み出された芸術の数々をお楽しみ下さい。

しだれ桜、かがり火、おぼろ月の競演



富田溪仙《祇園夜桜図》

制作年不詳 前期

歴史人物画の傑作



安田鞞彦《飛鳥の春の額田王》

昭和39年(1964)

再興第49回院展 前期

会 期 / 2019年4月6日(土)～5月26日(日)

※会期中展示替えがあります(前期:4月29日まで、後期:5月1日から)

休 館 日 / 毎週月曜日

※ただし4月29日、5月6日は開館、4月30日(火・祝)、5月7日(火)は休館

開館時間 / 10:00～19:00(入場は閉館の30分前まで)

観 覧 料 / 一般1,200(1,000)円、大高生・70歳以上800(600)円、中学生以下無料

※リピーター割引:2回目以降、美術館窓口での本展半券提示で当日券200円引き。

※()は、前売および20名以上の団体料金(団体券は来館当日に限り購入可能)。

※障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料。

前 売 券 / 2019年2月15日(金)から4月5日(金)まで以下の箇所にて販売

静岡市美術館、チケットぴあ(Pコード769-465)、ローソンチケット(Lコード43995)、セブンチケット(セブンコード071-339)、谷島屋(バルシェ店、マークイズ静岡店、高松店、流通通り店)、戸田書店静岡本店、MARU ZEN&ジュンク堂書店新静岡店

主 催 等 /

主催:静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、NHK静岡放送局、NHKプラネット中部
特別協力:滋賀県立近代美術館 協力:日本美術院 制作協力:NHKプロモーション 後援:静岡市教育委員会、静岡県教育委員会

関連イベント / 講演会、ギャラリートーク、未就学児向けプログラムなど開催。 詳細はチラシをご覧ください。

・夜7時まで開館
・毎週木曜・土曜は
トークフリーデー!